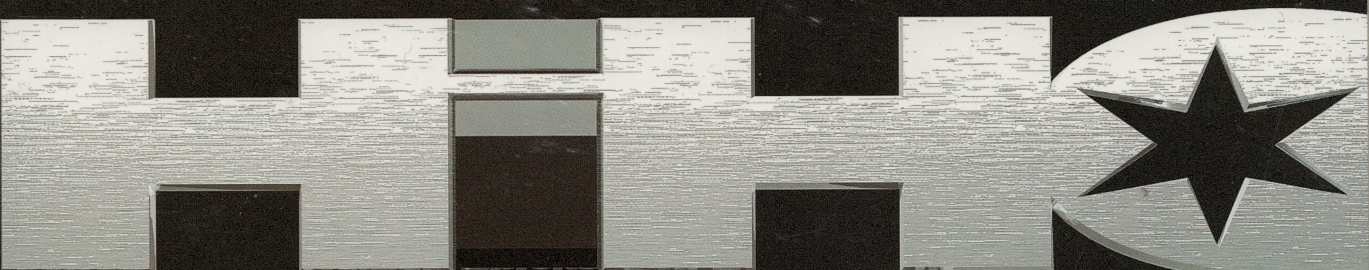


★新企画! 映画秘宝版「あの人は今……?」監督編!



Action, Sci-Fi, Horror, Chicks, and Rock & Roll!
Movie Magazine for Guys

映画
秘宝
いろいろな意味で恐怖の映画雑誌

洋泉社MOOK

volume
38

FEB. 2003



TERROR ISSUE

For Real Movie Gang

『火山高』
魁!大韓男塾
バカでーす!

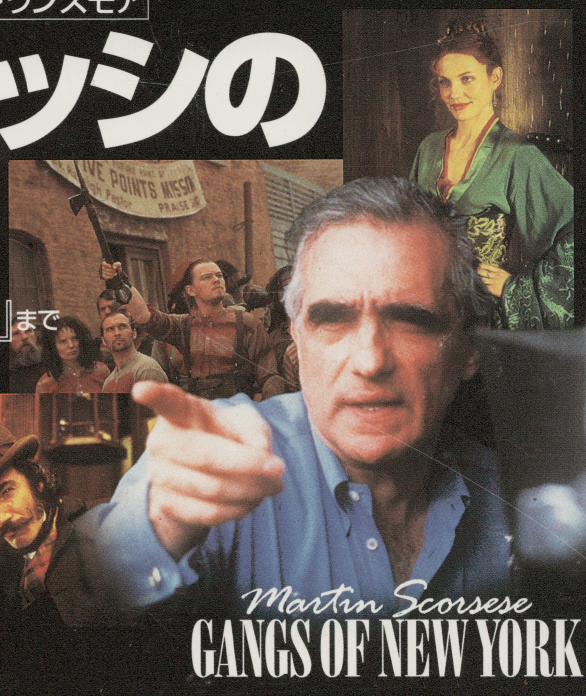
ギャングなあなたの イエスタディ・ワンスモア

マーティン・スコセッシの アンダーワールド

『グッドフェローズ』から『ギャング・オブ・ニューヨーク』まで

公開20周年記念
インディーズ・スプラッターの金字塔はこうして作られた

死霊のはらわた &『呪怨』『ゴーストシップ』



Martin Scorsese
GANGS OF NEW YORK

Contents

vol.38 2003

表紙写真:
『グッドフェローズ』(ワーナー・ホーム・ビデオ提供)
『ギャング・オブ・ニューヨーク』(松竹映画提供)



イエスタデイ・ワンスモア

『グッドフェローズ』から『ギャング・オブ・ニューヨーク』まで

マーティン・スコセッシの アンダーワールド

.....42

ジョー・ダンテからピーター・ハイアムズまで あの人は今、どこで何をしている?

忘れちゃいけないか!? あの監督列伝

.....33

大韓版、炎の転校生!? 『火山高』

.....50

真冬の怪奇映画特集 **イエスタデイ・ワンスモア**

祝20周年! サム・ライミの出世作

『死霊のはらわた』

.....56

日本映画最恐のホラー、『呪怨』
スクリーンに大復活

.....66

大槻ケンヂの激突! パイパニック対談 『呪怨』Special 奥菜恵の巻

『ゴーストシップ』

.....70

放映30周年 いよいよDVD化『木枯し紋次郎』

.....80

中村敦夫INTERVIEW

HI-HO Girls

ジェニファー・ロペス/クリスティーナ・アギレラ/
シャノン・エリザベス/エリザ・ダシュク and More!

.....2

Specialインタビュー&撮り下ろし 釈由美子

.....8

万引き裁判結審記念 **VINTAGE PIN-UP GALLERY**

ウィノナ・ライダー

.....10

HI-HO VIP INTERVIEW

元“ゴブリン”の衝撃発言! クラウディオ・シモネッティ

.....74

伝説のロック・バンド“ザ・バンド”『ラスト・ワルツ』DVD化記念

ロビー・ロバートソン

.....76

異色の日系人バイプレイヤー ケイリー=ヒロユキ・タガワ

.....78

ギンティ小林 in 『GGGTリプルG』 Mission.2『ロマンポルシェ。と対決!』

.....39

EXPRESS

ディカプー! 『ギャング・オブ・ニューヨーク』

.....12

ジョニー! 『jackass the movie』 & トム君! 『ラスト・サムライ』

.....14

スー・チー! 『トランスフォーマー』

.....16

クボツカ! 『魔界転生』

.....18

亜細亜活劇映画通信

.....19 ウエダハジメの地獄の映画観光

.....21

秘宝特選街.....22 サウスパーク通信.....72

Coming New Pictures.....84

『クン・パオ! 燃えよ鉄拳』『アウトライブ—飛天舞—』etc.

バトリック・マシアスのUSAレポート.....102

COLUMN.....104 MEDIA CHECK.....111

FBBの映画欠席裁判.....118 Readers Attack!.....120



GROOVY.

祝20周年！ ある日、森の中、死霊さんに出会った！

ホラー映画の歴史を血と内臓で塗り替えた、スプラッター映画の金字塔がついに登場！

「俺たちは本物の映画を作るんだ！」

気合いと根性だけで撮影を開始した若きサム・ライミたちを待っていたのは

死霊よりも恐ろしい大自然の猛威と、本当に呪われた山小屋だった！



Why have you disturbed our sleep? Awakened us from our ancient slumber?

You will die! Nightmare is before you.

One by one we will take you...

死霊のはらわた

構成・文／高橋ヨシキ YOSHIKI TAKAHASHI

「死霊のはらわた」20周年アニバーサリー版
The Evil Dead
83年米／監：サム・ライミ／製：ロバート・タバート／
特殊メイク／トム・サリバン／出：ブルース・キャンベル、
エレン・サントフィス、ベッツィー・ペーカー、ハル・デル
リック、サラ・ヨーク／メイク／シェンプの皆さんほか、
ジェイ・ブイ・ディー配給／03年新春第2弾、シネ
セン渋谷にて血まみれ大公開！

1978年の晩秋、デトロイト郊外の
ドライブ・イン・シアターを頻繁に
訪れる一台の73年型デルタ88オ
ールズモービルがあった。上映されて
いた映画は『ナイト・オブ・ザ・リ
ビング・デッド』、『サランドラ』、
『悪魔のいけにえ』、『ハロウィン』と

いったホラー映画の数々。他の観客
が興奮してクラクションを鳴らし、
ヘッドライトを点滅させるのと対照
的に、このオールズモービルに乗っ
た3人の若者は映画のスクリーンと客
の反応を見比べ、冷静にメモをとっ
ていた。3人の名前をそれぞれサム・
ライミ、ロバート・タバート、そし
てブルース・キャンベルという。

■低予算ならホラー映画

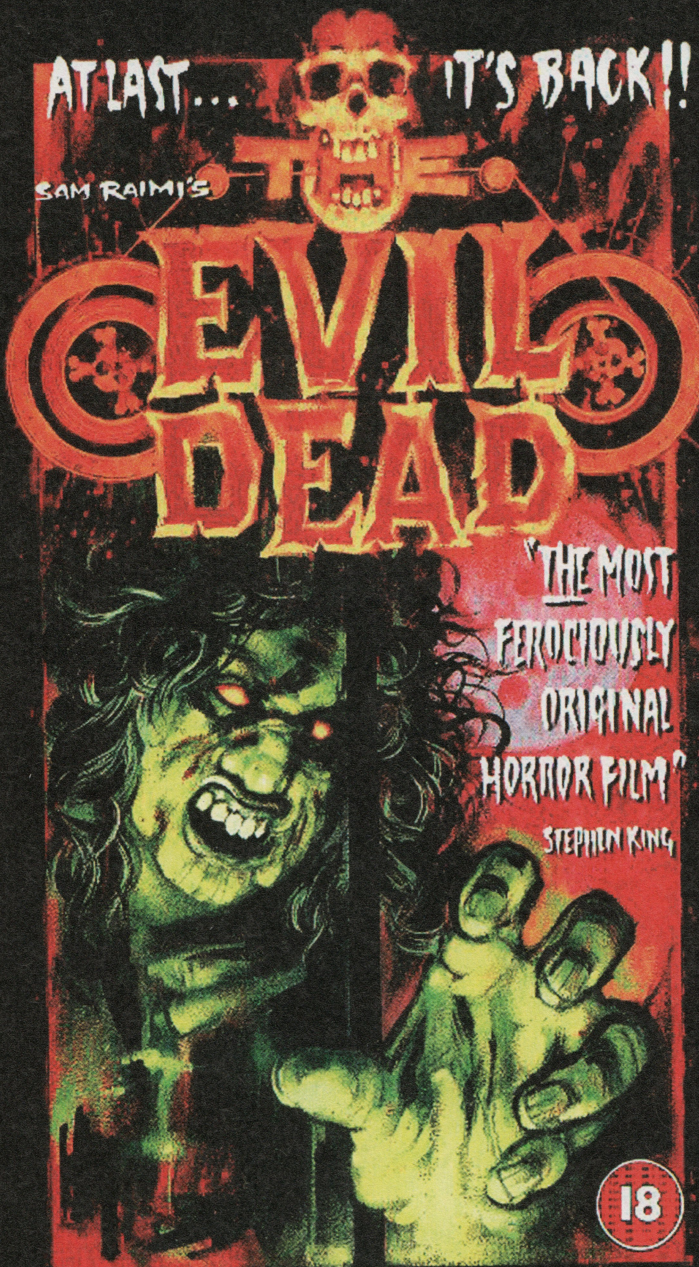
映画館でかかる、「本物の」映画を
作ろう。ミシガン州立大学で知り合
い、一緒に自主映画作りをしていた
ロバート・タバートに最初こう持ち
かけられた時、サム・ライミは一笑

に付したという。子供の頃から8ミリ
映画を作り続けてきてはいたが、そ
れと「本物の」映画作りはまったく
違うものだと考えていたからだ。確
かに、いくつかの作品は大学で上映
会を開き、観に来た連中を楽しませ
る事にある程度成功はしたと思う、
しかし……。

だが、経営学を学んだタバートが
実際に投資家をつのって資金を集め
出し、機材のレンタルなども可能だ
と分かってきたため、「分かった。そ
れじゃあ、とにかく、やれるところ
までやってみよう」という事になっ
たのである。「三馬鹿大将」の大ファ
ンだったライミとキャンベルはコメ
ディを作りがっていたが、ウケな

かった時のリスクが大きいとの理由で却下。低予算で製作でき、かつそれなりの集客が見込めるものは……ホラー映画だ! 『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』も『悪魔のいけにえ』も、素人同然の監督が合いだけで作った映画なのに、あれだけのヒットになり得た、という事実がライミを勇気づけた。自主映画時代から技巧派で知られたライミだったが、今回は「本物の」映画を作らなければならない。ホラー映画は観客を誘導し、精神的に袋小路に追いつめなければならないわけだが、それをうまくやるためにはリサーチが必要だった。ドライブ・イン・シアターにライミたちが足繁く通ったのはそのリサーチのためである。観客が悲鳴をあげるのはどういうシーンなのか、また、どのようなペース配分が心理的圧迫感を与える上で効果的なのか。トビー・フーパーやジョージ・A・ロメロ、ウェス・クレイヴンそしてジョン・カーペンターの映画について、詳細な対照表が作られた。やるからには徹底的に怖い映画にしなければならないのだ。『死霊のはらわた』は、決して「8ミリ映画を作っていた素人が偶然一発当てた」ものではない。『死霊のはらわた』のショック・シーンの数々は、ホラー慣れた観客をもアッとさせるために注意深く配置されたものなのだ。自主映画界の「技巧派」サム・ライミならでは、テクニックへのこだわりがそこにはある。余談になるが、『死霊のはらわた』の地下室に『サランドラ』の破れたポスターが貼ってあるのは、『サランドラ』で『ジョーズ』のポスターが貼ってあったシーンへのオマージュだ。また、チェーンソーの置いてある道具部屋には動物の骨が飾ってあるが、これは『悪魔のいけにえ』への目配せである。DVDのコメンタリーでサム・ライミが言っていたから間違いない。

さて、いくら「おそろしく怖い映画を作ります! リサーチも完璧です!」と口で言ってみたとこで、今まで作った8ミリ映画だけでは投資してくれるパトロンたちを納得させるのは難しい。ライミたちは見本と



グレアム・ハンフリーによる『死霊のはらわた』イギリス版ポスター。カッコイイ。

なる映画を8ミリで作ることにした。題名は『Within The Woods (森の中で)』。森はずれの一軒家で、2組のカップルが休日を楽しんでいる。そのうちの1組はピクニックに出かけるが、その土地はかつてのインディアン墓地。それと知らずに封印を解いてしまったカップルの男(ブル

ース・キャンベル)が惨殺されているのを見た女(エレン・サンドワイス/『死霊のはらわた』ではシェリルを演じた)は、必死で家に逃げ帰る。しかし、死んだと思っていたブルースは、インディアンの死霊に乗っ取られたゾンビとなって帰ってくるのだった……。

内容面でも映像テクニックでも『死霊のはらわた』との共通項が多い『Within The Woods』は、1979年8月から数回に渡って、デトロイト東部のパンチ・アンド・ジュディ劇場で上映される運びとなった。名も無い学生が撮った32分の短編8ミリ映画がなぜ?と思われるかもしれないが、実はパンチ・アンド・ジュディは週末の深夜に『ロッキー・ホラー・ショー』の大騒ぎ上映を行っていた劇場で、『Within The Woods』を観た館主が『ロッキー〜』の前座なら! ということで映写を許可してくれたのだ。『ロッキー〜』ファンは『Within The Woods』に大喝采を送り、ライミは「本物の」映画を作る自信と、投資家の信頼の両方を手にする事となった。

いよいよ「本物の」映画づくりを始める時が来た。

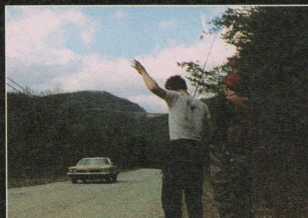
■呪われた山小屋

1979年、『死者の書 (Book Of The Dead)』と名付けられた66ページの脚本(ライミは、脚本の1ページがだいたい1分に相当する、というお約束を知らなかった)を元に、『死霊のはらわた』の製作が開始された。メインとなる撮影現場はテネシー州モリスタウン近くのとある古い山小屋。この小屋の改造が最初の大仕事となった。小屋の床はなぜか厚い牛糞の層で覆われていたのでそれを取り除き、照明を設置するために天井の板を剥がした。小屋へと続く小道はもはや道に見えないほど雑草が生い茂っていたので焼き払った。古物商から買った家具を運び込んだ。入り口にブランコを取り付け、壁を塗り直した。地下室があるように見せかけるため、床下に人ひとり入れるぐらいの穴を掘った(地下室のシーンはミシガン州で別に撮影された)。汚く、水道もなく、かろうじて残っていた発電機は故障していたが、ライミたちはこの山小屋を気に入っていた。というのも、この山小屋は地元では有名な「呪われた家」だったからだ。山小屋が建てられたのは南北戦争時代の事だが、完成が間近

恐怖! なぜ若者は朽ち果てた山小屋を目指すのか!? THE LAST CABIN IN THE WOODS



ルンソルン気分で山小屋に向かう若者たち。サム・ライミはわざとタサイ70年代風の服を着たので、「こんな格好で外なんか歩けるか!」とブルース・キャンベルに文句を言われた。73年型デルタ88オールズモービルは元々ライミの父親の車で、『クイック・アンド・デッド』以外のほとんどのライミ映画に登場する。



途中、一行はアホみたいなヒッチハイカーに遭遇するが、もちろん乗せない。それどころか、「パーカー」とか言って笑っている。『悪魔のいけにえ』のヒッチハイカーの場面とは大違いだが、実はハイカーを演じているのは監督のライミ(左側)と製作のタバートだった。実はサム・ライミはカメラ出演大好き。



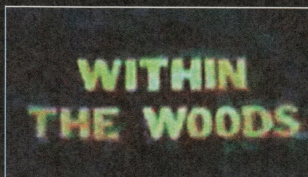
ガタつく危険な橋を越えると、腐った山小屋があった。公開当時日本はバブルど真ん中だったので、「いくら何でもあんな小汚い小屋に行く若者がいるもんか」と言われた。スコットが近づいていくと、風に揺られて動いていたブランコが突然止まる。不安感を煽るカメラアングルと編集、それに音響効果はお見事。



ドアを開けると「パート2」で大活躍した鹿の剥製があった。よほど空気が長年放っておかれた山小屋の雰囲気を感じ上げているが、これは実はタバコの煙だった、と、DVDのコメンタリーでは言っていた。山小屋の内部にあるものは、すべて撮影隊が運び込んだもの。ライミの母親が使っていた古いミシンもそのひとつだ。

(注意) この特集には『死霊のはらわた』の本編中にある超残酷シーンを随所に掲載いたしております。心臓の悪い方は十分慎重にページをめくられますよう、よろしくお願い申し上げます。

元祖『死霊のはらわた』
WITHIN THE WOODS
 誌上ロードショー



暗闇に浮かび上がるタイトル。森の中が怖いのは「ブレア・ウィッチ」の専売特許ではない



ピクニックを楽しむカップル。しかし、そこは呪われたインディアンの墓地だった



彼氏が何者かに惨殺され、家に逃げ帰る女。しかし家の定カギが開かなくて苦悶する



死霊にのっけられてゾンビとなったブルース・キャンベルが襲いかかる！



ラスト、倒れと思ったブルースが再び復活！『死霊のはらわた』のスコット復活シーンと全く同じ



『Within The Woods』のパブリシティ用スチール。こんなところまで『死霊のはらわた』と一緒に、本編中にはこんなシーンはない



「ハートの4、スベードの8、スベードの2、ダイヤのジャック、クラブのジャック！」
 ジャーン！ 遂にシェリルが死霊に憑依されてしまった。トランプの絵柄を見ないで当てるのが得意

に迫った時、煙突の煉瓦を積んでいた大工が稲妻に打たれて死んだ。縁起が悪いということでその後山小屋には誰も住まなかった。時は過ぎて1920年代のある雷雨の晩、おばあちゃん、お母さん、娘の3人から成る貧乏な一家がこの山小屋にやってきた。だが、その晩のうちに**お母さんとおばあちゃんが謎の死を遂げ、恐怖のあまり娘は発狂してしまった。**

『死霊のはらわた』の撮影中にも山小屋は雷雨に襲われたが、その時、近所の村人がやってきて「アビゲイルばあさんを見なかったか？」とスタッフに尋ねた。実はこのアビゲイルばあさんこそ、かつて母親と祖母を亡くした娘その人。恐怖の一夜を思い起こさせる雷雨に我を忘れたアビゲイルが、**大声で自分の母親と祖母の名前を叫びながら森の中へ走り去った**というのだ。撮影が終了しても、アビゲイルばあさんの**行方は分からなかった**。そして、すべてが終わってスタッフが引き払った後、**山小屋は稲妻に打たれて炎上してしまった**という（ブルース・キャンベルによれば稲妻の直撃で小屋が炎上した、というのは**ライミの作り話**で、実際には酔っぱらいの火の不始末が原因で燃えてしまったとのこと。いずれにしても小屋が焼け落ちたのは

事実で、パート2の時には1作目の山小屋をモデルに、新たな小屋を造り直す羽目になってしまった）。

山小屋の準備には、スタッフ総出で10日間が費やされた。

1979年11月14日、いよいよ『死者の書』の撮影が始まった。



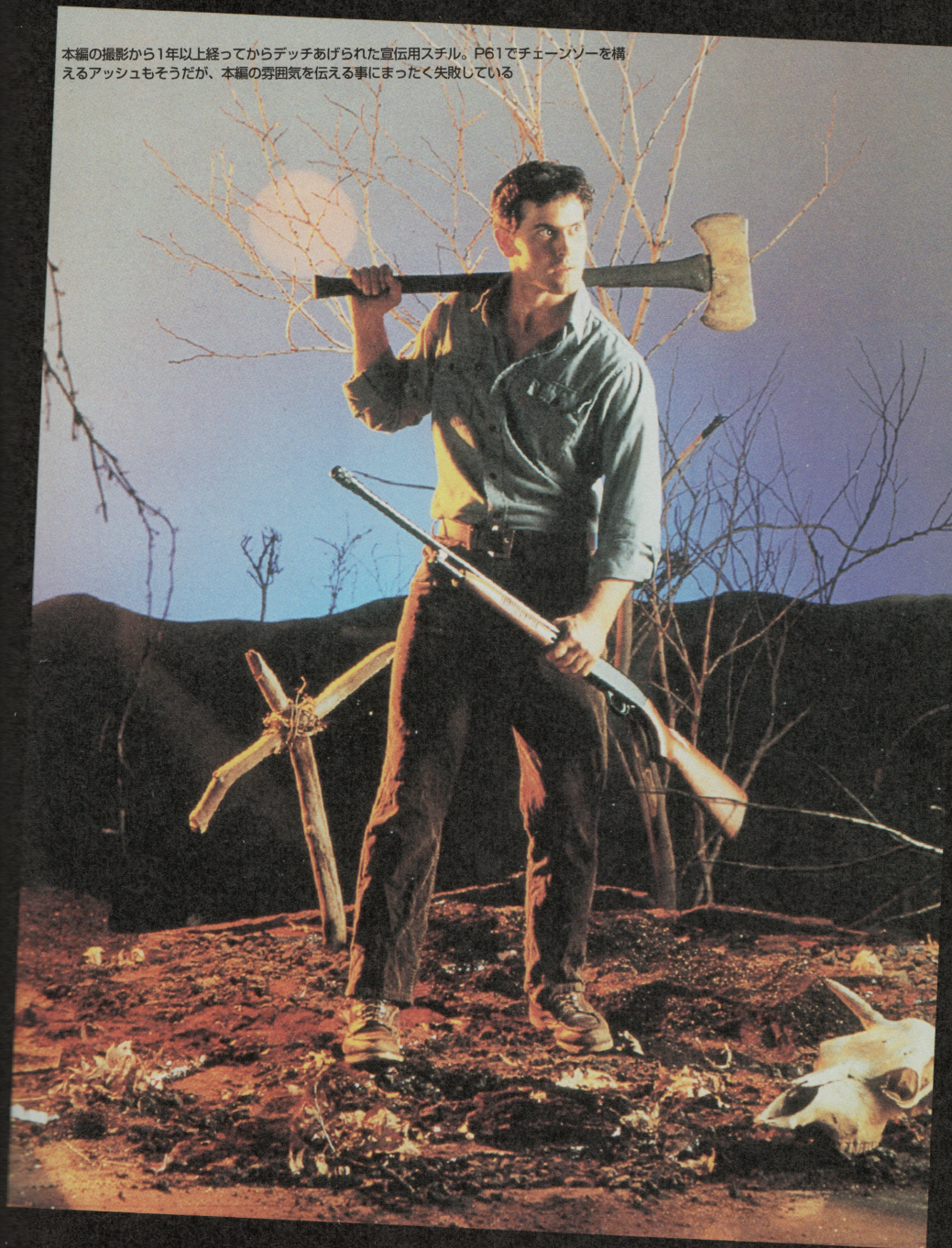
人間に戻ったふりをしたりしてアッシュを苦しめるリンダ（ベッツィ・ベイカー）。コンタクトレンズを連続装着できないので、死霊のシーンは毎回まとめて撮影された

■撮影のはらわた

『死者の書』のスタッフ／キャストの総勢は37人。今までライミが手がけてきた8ミリ映画と同様、俳優とスタッフの区別はないも同然で、誰もが何かしらの仕事を割り振られた。灼熱地獄の中で撮影が強行された『悪魔のいけにえ』と対照的に、『**死者の書**』の**撮影は寒さとの戦いだった**。ライミたちが『死者の書』の撮影を始めてすぐ、前例がないほどの**大寒波がテネシー州を襲った**。実は、ライミたちの通う大学のあるミシガ

ン州にも撮影できる山小屋のあてがあったのだが、くだんの山小屋があるテネシー州の方が温かい、という理由でロケ地が決定されていたのだ。その判断が**まったくの裏目に出た**格好である。屋外シーンのアウトテイクには、尋常でない寒さに息が真っ白に映ってしまったカットが残されている。ライミの手はかじかみ、フィルム交換さえおぼつかなくなった。給湯システムはなかったが、電気式のコーヒーマーカーがあったので、**ライミは熱いコーヒを手にかけて作業を続けた**。撮影が行われるのは

本編の撮影から1年以上経ってからデッチあげられた宣伝用スチル。P61でチェーンソーを構えるアッシュもそうだが、本編の雰囲気伝える事にまったく失敗している



主に夜だったが、ケーブルは凍り付き、地下室へ続く階段に見立てた穴には霜柱が立った。若さと情熱だけが、ハードな撮影スケジュールを引っ張っていた。シェリル役のエレン・サンドウィスは「何もかもキツかったわ。メイキャップも、森の中を走らされたのも。毎晩、おそろしく寒い穴に入って、頭だけ出して撮影して」とその苦勞を語っている。「でも、若かったし、周りは友達ばかりだったから撮影を楽しむことができたの」。サンドウィスが森で木々にレイプされるシーンは、主に逆回転撮影を利用したトリック・ショットだったため、当人は完成した映画を観るまで自分がどんな目に遭わされているのかよく分かっていなかった。「娘と一緒に『死霊のはらわた』は観られないわね」。

ライミの演出方法も役者たちにとっては問題だった。撮影時間は1日18

時間にも及んだのに、ライミはまったくマスター・ショット（シーン全体を通しておさえておくショット）を撮ろうとしなかったからだ。編集時の自由度を確保するため、ライミはありとあらゆるアングルを試す事に執着していたが、その時に出される指示は「顎をもう1インチ上！ 鼻はもう2インチ前！」といったものでしかなく、役者たちはどういうシーンで何を演じているのか分からなくなる事が多かったのだ。

さらに役者たちを苦しめたのは特殊メイクだ。やはり大学でライミと知り合ったトム・サリバンがコマ撮りを含む特殊効果全般を引き受けていたが、自主映画での経験しかないサリバンの作業はかなり荒っぽかったからだ。例えば、特殊メイクで使うアプライエンスを作るためには俳優のライフ・マスクが必要だが、サリバンは直接石膏で役者の顔の型を

とった（通常は歯科で使われるアルジネイトを使う）。眉毛と睫毛をワセリンで保護するのを忘れたため、リンド役のベッツィ・ベーカーの睫毛は石膏に埋まって全部抜けてしまった。眼球を半分覆う鞏膜コンタクトレンズは激痛をもたらしたので15分しか連続装着ができなかった（鞏膜コンタクトレンズを使う時には眼科医の付き添いが奨励されている。もちろん『死者の書』撮影現場に目医者はいなかった）。フライドチキンの骨で作られた「生簀の剣」は悪臭を放っていた。

寒さが厳しさを増す中、撮影は当

初の予定の3週間をとっくに過ぎてても一向に終わる気配がなかった。

■そして誰もいなくなった

12月後半にさしかかったというのに、ライミたちは相変わらず山小屋の床に何リットルという血糊をぶちまけ続けていた。撮影用の血糊はシロップを使用していたので、床はベトベトになり、臭気を放ち始めたが、暖炉の灰をその上にまいて撮影は続けられた。『死霊のはらわた』を注意深く観れば、カットによって床の色が元の木の色だったり、灰色だったりするのに気づくが、これは灰をまいていたからだ。

ブルース・キャンベルは奇酷な現場にも関わらず、アッシュ役に真剣に取り組んでいた。「俺はちゃんとした演技の訓練を受けたことがないし、それは傍目にも明らかかもしれない。演劇学校じゃいろんな理論を教えてくれるかもしれないが、俺はカメラの向こうのサムからより多くの事を学んだね」。時たま、疲れ切ったブルース・キャンベルがうとうとしかけると、ライミは木の枝でつついて起こして撮影を続行させた。

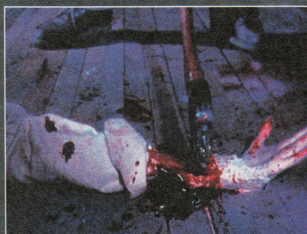
スタッフ、およびキャストのほとんどは、そもそも3週間の予定で撮影に加わっていたため、クリスマス前には家に帰るつもりでいた。しかし、ライミはまだ彼らを引き留めておけるとし、「あと3週間だけ撮影に協力してくれないか。ギャラは興業収入から配分するから」と提案した。翌日、ライミたちを残してほぼ全員が家路についた。残ったのは監督のサム・ライミ、製作のロバート・タパート、主演のブルース・キャンベル、音響担当のジョシュ・ベッカー、そしてコック兼ドライバーのデビッド・グッドマンのわずか5人。数日後に友人のジョン・キャメロンとマイク・ディッツ（スチル・カメラマン）が応援に駆けつけたが、それでも総勢7名で残りの撮影を片づけなければならなかった。

ライミは急遽、脚本の書き直しを迫られた。『死霊のはらわた』後半部分でブルース・キャンベルの1人芝居ともいえるシーンが多いのは、そうでないシーンを撮影する事が物理



スタッフもキャストもほとんど帰ってしまったため、例えばこのシーンでは死霊の手をライミ本人が演じている

JOIN US!



死霊になったシェリーを斧でぶった斬るシーンでは、床から手や足を出して撮影が行われたが、本物の斧がすぐ横に叩きつけられるので危険さあまりなかった



腕を斬りつけられた死霊シェリーは、自ら自分の手首を食いこむ!『Within The Woods』にもまったく同じシチュエーションの場面がある

的に不可能だったからだ。メインとなる死霊を演じていたエレン・サンドウィスも帰ってしまったため、製作のロバート・タバートは女装して死霊シェリルを演じさせられたり、スコットの死体役をさせられたりもした。

途中で脚本が変わってしまったため、ラスト・シーンは最後まで決まらなかった。「どういうラストにするかは分からないけれど、クレーンは使おうと思う」とライミが言ったため、高価なレンタル料を払いながら、一向に使われないさくらんぼ摘み用のクレーンが山小屋の隅に置かれ続けた。

『死霊のはらわた』の伝説的なラスト・シークエンスを実際に考えたのはジョシュ・ベッカーだった。映画で描かれている通りのエンディングを思いついたベッカーは、興奮しながらライミにそのアイデアを説明した。しかし、ライミの返事は芳しいものではなかった。「たぶん、違うと思うな」。だが、他に何も撮るものがなくなった日、ついにエンディングが撮影された。ベッカーの「撮るだけ撮っておいて、あとで違うと思うんだったらカットしちゃえばいいんだからさ」という一言でライミが

撮影を決意したのだ。

ラストシーンの撮影には、他にも死霊のPOV（主観移動撮影）ショットで多用された「シェイキー・カム」システムが使用された。「シェイキー・カム」は、木の板にカメラを固定、木の両端につけた紐を首の後ろで結んで（駅弁売りを想像してもらえばよい）、そしてその木の板を両手で斜めに動かしながら撮影する方法だ。原始的だが、これだけの事で手持ち



映画の冒頭シーン撮影中のひとコマ。カメラマン（右から2人目）が手にしているのが「シェイキー・カム」

カメラ特有のぶれが驚くほど吸収されるのだ。スティディカムなど夢のまた夢、という状況下で、何とかぶれない移動画面を作りたいライミ達の工夫が生んだシステムである。

恐怖の一夜が明け、朝日の中、山小屋から茫然とした面持ちで出てくるアッシュ（ブルース・キャンベル）。しかし、裏手の森の中から、邪悪な何者かが猛スピードで彼に迫ってくる。山小屋の裏口を倒し、内部のドアを開き、表の扉をぶち破り、絶叫するブルース・キャンベルにカメラが肉薄したところで映画は終わる。異様な迫力を持ったラストシーンだが、実際には物陰に隠れたスタッフがドアをけつ飛ばしたり、引っ張っ

たりして撮影が行われた。

ラストシーンが片づき、すべての撮影が終了したのは1980年の1月。「もう撮影しなくていいんだ!」と、ブルース・キャンベルは小道具を全部ショットガンで撃ちまくった。いらない物は全部まとめて外に積み上げ、火を放った。巨大な火が、3ヶ月の労苦を癒すかのように燃え上がった。

■『死者の書』から『死霊のはらわた』へ

撮影は終わった。しかし、それは山小屋での撮影に限っての話だった。デトロイトに戻ったライミ達には、まだ死霊が腐っていくシーンの特殊撮影、および地下室シーンの撮影などが残っていた。また、それが終了したとしても、さらに編集と音響という大問題が彼らに立ちはだかっていた。資金は底をつきかけていたので、タバートは再び投資家の説得にあたった。プロの編集者を雇えば、「撮影してきた膨大なフィルムに命を吹き込むことができる」ので、追加投資をして下さい、というわけだ。説得は成功し、ニューヨークでCFや映画の編集をしていたエドナ・ルース・ボールに編集を依頼することになった。当時エ

ドナは『魔界からの逆襲』（81年）の編集をしていた事もあり、ホラー映画には向いているようだったからだ。膨大な量のラッシュと格闘の末、エドナは97分の映画をまとめ上げた。やや長過ぎる、と感じたライミはエドナの助手を務めていた青年こと、若きジョエル・コーエンと協力して、さらに10分程度をカットしてファイナル・カットとした。

『死者の書』のプレミアは、家族、投資家などを招いて1981年10月15日、デトロイトのレッドフォード劇場で行われた。大きなパイプ・オルガンが設置されている古い映画館である。バツハの「トッカータとフーガ」がそのオルガンで演奏されたのに引き続き、『死者の書』の上映が始まった。

反応は劇的だった。木々がシェリルをレイプするシーンでは悲鳴が上がり、鉛筆が足首に突き刺される場面は観客を打ちのめした。ライミの演出はしっかりと観客をとらえて離さなかったで、劇場は騒然となっ



衝撃のラストシーン。まさか「パート2」でこの場面の続きが観られるとは思わなかった



死霊スコットの両目を潰すシーンでは、ダミーの頭部が使用された。声がうるさいのでつい見落としかちだが、よく見るとまったく表情が動かないのでダミーだと分かる



『死者の書』がうめき声をあげる。特撮担当のトム・サリバンは、極力ストップ・モーションだとバネないよう、実写の炎や液体を合成した画面作りを行った

「フェイク・シェンプ」って何だ？

サム・ライミの映画を観ていると、「フェイク・シェンプ Fake Shemp」という役名でクレジットされている人物が沢山いるのをご存じだろうか。「死霊のはらわた」も例外ではなく、弟のデッド・ライミも含め全部で18人も「フェイク・シェンプ」がいるではないか。大体そんなに出演者いねえだろ！と思うのも当然で、実はこの「フェイク・シェンプ」というのはボディ・ダブル、いわゆる代役の事。ライミは代役を常に「フェイク・シェンプ」と表記するのだ。シェンプとは三馬鹿大将の1人、シェンプ・ハーワード。心臓を患っていたシェンプ・ハーワードは、三馬鹿大将ものの短編（同時進行で何本も撮影されていた）の製作途中で死亡してしまった。困った映画会社は代役を使って何とかごまかそうとしたものの、にせのシェンプはいつもうつむいていたり、後ろを向いていたりするのでバネバネだった。そして、大の「三馬鹿大将」フリースのライミやブルース・キャンベルは、そのバネバネ具合をいつも笑って観ていたのである。こうした経緯があって、映画で代役を使う時、ライミ組ではそれを「フェイク・シェンプ（偽シェンプ）」と呼ぶようになりましてとさ。

読むと死霊になってしまふ

「死者の書」プレゼント

ジェイ・ブイ・ディーより「死霊のはらわた」20周年アニバーサリー版公開を記念して製作された、「死者の書」を20名様にプレゼント。元ネタはアンカー・ベイ版のDVD「死者の書バージョン」の豪華ラバー製パッケージより（ただし今回のプレゼントはそれを元に作られたブックレットです）。提供は「ハマー・ホラー・アンド・ファンタスティック映画大全」の著者、伝説の宣伝マンこと梶原和男先生より。プレゼント応募番号は「カジワラ」。以上！

た。
「『死霊のはらわた』は、映画のテクニックについて実地で学ぶ場だった」ライミは後にこう語っている。「自分で試してみることで、色んなテクニックについてより深く学ぶ事ができたと思う。なぜ、わけの分からないジャンプ・カットをしたらいけないのか、どういう風にすれば観客の心をつかめるのか。本で読んで学ぶのも結構だが、実際にやってみる方がいいに決まってるさ」。

大成功に終わったプレミアの後、ライミ達はフィルムを抱えて配給会社を探し回った。救いの手を伸ばしたのはアーヴィン・シャピロ。『勝手にしやがれ』、『大いなる幻影』といった外国映画をアメリカで紹介した人物であり、ジョージ・A・ロメロとも関わりのある、ホラー映画好きの老人だった。試写室で『死者の書』を観たシャピロはライミにこう言った。「おめでとう。今日は君のラッキー・デーだ。君の映画は『風と共に去りぬ』ってわけじゃないが、金を稼ぎ出せると思う」。シャピロはニューラインに『死霊のはらわた』を持ち込み、アメリカ国内での公開はニューラインが担当することになる。

その時まで『死者の書』のままであったタイトルは、「パンチに欠ける」という理由でシャピロが却下。『この売女どもは魔女だぜ（These Bitches Are Witches）』、『死霊の男たちと死霊の女ども（The Evil Dead Men and the Evil Dead Women）』、『血の洪水（Blood Flood）』などという候補が出されたが、最終的に『死霊

のはらわた（The Evil Dead）』に決定した。

シャピロの提案で、『死霊のはらわた』はヨーロッパの映画祭にも出品された。行く先々で『死霊のはらわた』は話題を呼び、カンヌではたまたま『クリープショー』のキャンベーンで来ていたスティーヴン・キングがこれを見て激賞（最近は何でも激賞するので信用が低下しているが）、『死霊のはらわた』はかくしてホラー映画の新たなクラシックとなった。

『死霊のはらわた』が日本に初上陸したのは1985年。ビデオ・マニアの間では既に輸入版で大評判を呼んでいたが、筆者はガマンして（神田のビデオ屋「ダンウィッチ」がボツクリ値段で、高校生には手が届かなかったというのが真相）、公開に先立って行われた一般試写で初めて観た。「パリ・ファンタで好評判」だの「こま切れにされた人体がなおもヒクヒク動く！」とかいう強烈な噂に期待はふくらむばかりだったが、会場のTBSホールに着いてみると、客席にはラジオの懸賞で当たったとおぼしきおばさん達が大量にいるのである。「大丈夫か、この人たちは……」と一抹の不安を抱えながら上映が始まった。心配は杞憂だった。それまで、スプラッター映画（この言葉も『死霊のはらわた』上陸で一気に日本国内に広まった）など観た事なさそうな彼女たちは、最初の方こそ「アライヤだ」だの「こわいわネー」などとヒソヒソ言っていたのだが、映画が中盤を過ぎたあたりからは、死霊

が出たり、エグイシーンになったりするたびに叫び、笑い、あまつさえスクリーンのアッシュに向かって「後ろから来るから気をつけなさいよ！ ホラ危ない！」と声援え始めたのだ。ギャグもちゃんと通じていた。若きサム・ライミの演出は遙か極端のおばさん達のハートをもうしづかみにする程のパワーがあったのだ。

かくして、「本物の」映画監督としてのサム・ライミ、「本物の」俳優としてのブルース・キャンベル、「本物の」映画製作者としてのロバート・タバートは誕生した。彼らは『死霊のはらわた』で約束の地へと足を踏み入れたのである。



参考文献

The Evil Dead Companion (Bill Warren)
The Evil Dead Journal (Josh Becker)
Fangoria
FakeShemps.com (www.fakeshemp.com)
Ladies of the Evil Dead
(www.ladiesoftheevildead.com/index.htm)
Deadites Online (www.deadites.net)

Special Thanks to
Shiny Kibe and ぶこをさん



そしてアッシュの受難は続く。パート4は本当に作られるのか？